

「御身の殉死なされる法華經は、三途の川にては船となり——冥途にては燈火となり、靈山へ參る橋で御座るぞ、梵天帝釋、四大天王、閻魔法王の御前にも、日本第一の法華經の行者日蓮が弟子檀那と名乗つて通られよ。」

「あ、有難う御座りまする——。」

二三度、微な聲で題目を唱へ終つた時、吉隆の頸はガツクリ、と前にうな垂れた。

「南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……」一同に唱ふる、嚴肅な、靜かな題目の聲は靜かな夜の松原の奥深く泌み渡つて行つた。

數日の後、館の後ろの丘に大きな新しい土饅頭が出来て數十本の長い旗が、麗かな朝風に翻がへつてゐた。そおして其處には、二人の出家が靜かに讀經してゐた、それは日蓮大上人と、弟子の日朗とであつた。

不幸なる哲人の物語



高崎 一一一

春の野邊に可憐な花がにつこり笑ひ小さな鳥や蟲などはたのしげに戀のうま酒を汲みかはしてゐました。野の向ふに大きな森こんもりしげつてゐて森の傍には始終暗い影の漂つてゐる廣場がありました。

そこに入る者は何となく氣が滅入りました。例令其人がどんな金持にしる乞食にしる軍人にしる政治家にしる道覺者にしる宗教家にしる詩人にしる皆同じでした。

詩人などはたえられなくてしく／＼泣出した相です。

そこは昔の刑場でした然今は何でもありません強いて昔の名残を索たらばその中央に兩風に曝らされた二本の柱が立つてゐました。

人々は云ひました。

「その刑場で刑死した多くの人達のたましいがそこに残つてゐる」と。

多くの人達はちつぽけな土地をもどうにかしようごごた／＼争つてゐましたがそこばかりはこうすると云ふ者はありませんでした持主はあるでしょうが俺の物だご云ひ張る者もありませんでした。

其處を訪ふ者もなく四邊は古池に石を投げた時起る水音の餘唄の様な静さでした。只夕暮になつて灰色の霽に四邊が漬ると森を越して原を越した彼方の寺の晩鐘がごーんと戀する人の林に靜にそこを訪れました。

すると木々は戀人の甘い口づけにあつた様にざわ／＼と身をふるはして喜びます。二本の柱は甘い陶醉にたえかねた様にゆら／＼とゆぎます。

ごんな日でも戀人はそこを訪れました。

雪の日など彼等は白妙にきかざつて戀人を迎えました。そしてその美しい粧の禿げ落るのも厭はずにざわざわと悦びました。凍付いた様だつた彼等の戀人は彼等の愛情に暖められては森を超へ原を越えて歸へつてゆきました。

二

或日一人の男が其處を訪れました。

釣瓶落しの秋の日が落ちて灰色に包まれた二本の柱は恨を呑んで刑死した多くの人達のもの様に見えまして。汚れた袷一枚に繩をぐる／＼と腰に巻き付て髪延の延た目の異様に輝く其男は物の怪を知らぬげにうそ／＼と歩いてゐました。

彼は哲人でしたそして亦詩人でした埃立つ人生を唄ふ得難い詩人でしたそして突として人生を語り人生を

唄ひました。あらゆる物を彼は美化しました。

春になると彼は陽炎の萌え立つてゐる緑の草の中に色々の花がかすかに笑を浮べ乍ら眠てゐて黄色や白の蝶がひら／＼と花の上を舞ふと花は蒼蠅相に葉を動して又深い／＼うまいに落ちます、眠りほうけた蒲公英などはたのしいまごろみにぐつたりと多くの蝶の爲す儘になつてゐるのを見乍ら。

そしてにはやかな春風に送くられて来る……

「野良唄や、馬子が鳴らすのどかな鈴音ひだるい鶏や猫の鳴聲、可愛い鳥や蟲の叫び、草や花から起るさゝめ言」などをきゝ乍ら。

じつと天地の叫を耳にして黙想に耽り春のひだるさに、ひんど云ふ馬のいなゝきにたのしい夢より醒めた様に、にやりと満悦の笑をもらしました。

生きんが爲の烈しい競走にあくせくと汗を出して働いてゐる多くの人の群を見ると彼は、にやりと笑ひ乍ら、

「お前さーたちはなんだつて此の結構なお天氣にそうやつて汗さーたらして働いてゐるだに」と云ひました人々は笑ひ乍ら、

「岩公手前にはわかんなかんべーおらたちやあー斯ふやつて春だらうが夏だらうがよ、またあ冬だらうが汗たらして働かなきやくえなえんだ」と云ひますと。

「くえなえつて、おらみていにかうやつてめえにち、おてんごさまあ、御拜んでよ歩きやあ、おてんごさまあ腹がやへつてくりや——あそこへいんでくえといつてくれらーな、そしてよポカ／＼暖くなりやあ、綺麗な花を咲かしてくれたりちつぽけな鳥をなかしたりしてくるだに、おめえさーたちあ、おてんごさま、あにおがまねーだ、おてんごさまさーおがんでよおらみていにこうやつて方々あるきなせい。」

とささ／＼氣の毒相に云ひますと人々は、

「あは……」
と大きな聲で笑ひ乍ら行きます。

人々は彼の事を馬鹿の岩公と呼んでゐました。そして彼は馬鹿が自分か岩公が自分なのか別りませんでした。

彼は又どうして生きてゐるのか何うして食ふのか考へてゐませんでした、腹のへると云ふことが自分にとつて最悲しい事だと考へてゐました。

人々は彼を見るに可愛相だと云つて食物を興へました、につと怪しい笑を浮べては彼はそれをたべました。彼は腹がへつて來ると所々の家の前に立つてはたべ物を呉れるのを待つてゐました。

そうすれば人々が彼の爲に食物を興へて呉れると考へてゐましたから…… (未完)